
刹那・神咒神威

Acta est Fabula

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刹那・神咒神威

【Nコード】

N9829Y

【作者名】

Acta est Fabula

【あらすじ】

次代を担うものが現れてくれた。「俺の役目も終わった」これは一人の男のもしも、そして、刹那の物語である。

プロローグ（前書き）

すみません、半年以上ぶりです。性懲りも無く三作目、こんな書くくらいなら続きかけと言ってくるかもしれませんが・・・本当にすみません一作目と二作目の書いていた話が五月くらいにパソコンが壊れたことによりすべてのデータが消えました。

そして今月まで仕事の都合により書くことが出来ませんでした。なので申し訳ないと思いますが、一作目と二作目を削除してこの話ひとつでやっていこうと思います。

未知なる結末と東方殺人伝を楽しみにしていた読者にお詫びします。

プロローグ

「・・・くつくく・・・」

男はこれから起きるであろうことに思いをはせ笑っていた。自分たちの後をついで行く者たちが現れてくれたこと、自分が倒された後に起こるであろう次代を担うものたちの戦い、そして・・・

「・・・滑稽だな第六天」

自分たちが・・・

「貴様は負ける!!」

勝利したことに。

「俺たちの勝ちだああ!!」

男は漂っていた暗い空間を、体は少しずつ粒子となって消えていく。だがそれに恐怖は無かった。次代を担うものが現れ自分たちの意思を継ぎ、自分たちに勝利したから。

「これで俺の役目も終わるか……。」

男は空間に身を任せ呟いた。

「……君が居なくなってから長い時が過ぎてしまったよ。」

「……なあ聞いてくれ、やっと俺たちの意思をついでくれるやつらがあらわれたんだ。あいつらがきつと俺たちが守ってきた黄昏よりもいい世界にしてくれるはずだから。」

「きつと俺だけじゃ駄目だったろうな……あいつらが居たから俺はここまでやることができたんだ」

男は自嘲ぎみに笑いながら答えた。

「司郎、戒、櫻井、ベアトリス、リザさん、アンナ、ミハエル、……そして先輩……。」

「戒も櫻井も真面目すぎてさあ、あいつらを殺したって言ったとき若干焦ってたんだ俺。しかもその後の戦いも殺す勢いで戦ってたし。リザさんとアンナはなにもなくて傍観してるのが多かったようなきがする。先輩にいたっては俺に座を取れて言うてくるし……。」

「ミハエルはミハエルでどこかに引きこもってるし、司郎にいたってはそれが必要だってのは分かるけど・・・場を引つ掻き回しすぎだろうが！！あれ絶対自分が楽しんでたろうが！！」

男は声を張り上げる、頭の中に悪友を思い浮かべたら馬鹿笑いしてた。・・・ム力つく。

「・・・でも本当にあいつらに感謝してるし誇りに思ってるんだ・・・」

男は仲間達の顔を一人づつ思い浮かべていた。消して忘れないように、自分の魂に刻むように。

「もし・・・」

「もし次があるのならまたみんなで・・・」

あの消えていった黄昏の刹那を味わおう・・・

ーうん、そうだね

「・・・っ！！」

男はそれが幻聴だとわかっていた。自分たちが守っていた黄昏の女神はもう居ない、今の座に座るやつに殺されたから・・・でも・・・

「・・・ああ、そうだね。」

男にはその声が幻聴ではなく自分の最後に彼女が答えてくれた最後の言葉だとそう信じることにした。

だから最後に男は彼女に最後にある言葉を伝えた・・・

「時よ止まれ・・・君は美しいから・・・」

そうつぶやくと男は粒子となってこの暗闇の空間から消えていった。

こうして夜都賀波岐首領、天魔・夜刀は次代の者たちに意思を託し
この舞台から退場していった・・・

だが、彼の物語はまだ終わっていないかった・・・

今から始まる物語は彼の話・・・

さあ、今から刹那の物語を始めよう・・・

この物語に脚本家はいない・・・

すべては、この物語に参加する役者しだい・・・

プロローグ（後書き）

はい、主人公は蓮炭です。神咒神威神楽ではこいつが主人公だろと思っただのかっこよさでした。

異世界転移（前書き）

グダグダな駄文を投稿。俺、文才無いのかなと思う今日この頃。
他の作者さんすごいですね。

異世界転移

目を覚ますと青い空と太陽が見えた。

「うつ・・・ここは？」

上半身を起こしながらあたりを見渡す。広場のような場所です。そこには遊具らしきものがあり俺はその中心のベンチに仰向けになって寝ていたらしい。

「俺は・・・いったい・・・」

俺は死んだはずだと思った。いや、現に倒されたことも覚えている。俺の首にあいつの一撃が通ったことも。そう、致命傷だった。

俺はもう一度周りを見渡す。さっきは気づかなかったが所々に十歳にも届かないであろう子供たちが遊具で遊んだり、ボールを蹴りながらそれを追いかけていたりしていた。

おかしい。何がおかしいと言えば今自分が居る場所そして状況がおかしかった。

「公園・・・だよな？ここ。」

そう、他人が見ればすぐにわかる事だが自分にはこの場所が信じられなかった。

あの世界には公園が出来るような文明開化はしていなかったからだ。俺たちが守っていたあの町には公園があった。だがその町の公園は所々が破壊されておりこと比べると天と地ほどの差があった。そ

して公園で遊んでいる子供達。子供達の服装はあの世界の服と比べるとかなり違っていた。そうまるで俺達が暮らしていた世界。あの黄昏にいたときの人々の服装とにていた。そして自分の服装、いつの間にか着ていた服は色が青の長袖の中に白いポロシャツ下がジーンパンと言う服装だった。

何故自分が服を着ていたのか覚えていないが。俺はこの世界が自分がいた世界じゃないと言う事に気がついた。

「異世界なのか・・・」

俺はベンチから立ち上がると近くにあったトイレに入ってしまった。頭が回らない、なぜ自分が異世界にいるのか、なぜ、自分は死んでいないのか、なぜ、なぜ、なぜ、考えるだけで疑問が湧き水のように湧き上がってくる。俺は気分を落ち着かせようとトイレの手洗いで顔を洗おうとした。

「な・・・」

そこでもう一つのことを気がついた。

鏡に写る自分、肌の色が肌色、そして髪の色が青、そして目の色も青になっている自分。

何故？何故俺は、あのときの姿に戻っている。第六天との覇道の闘ぎ合いで俺は、髪も体もそして目も変色していたのに。

「何がどうなってんだ・・・。」

考えがまとまらない頭にイライラしながら俺はその場所から離れた。

時間が経つにつれて冷静になってきた俺は、公園から離れ町の中を探索することにした。

看板からこの町の名前が海鳴市と言う名前だと言うことが分かった俺は道行く人に聞きながら図書館があるところに移動していた。

「でけえ・・・」

三十分もしないうちに到着した俺はその図書館の大きさに驚いていた。あの町にも図書館はあったがここまで大きくなかったからだ。コレなら俺の知りたいことが調べられると思い図書館の中に入っていた。

案の定図書館の中は広く、本棚が所狭しと並んでいた。

俺は歴史書がある本棚を探すために棚を散策し始めた。探し始めて5分くらいして目的の棚を見つけた俺はおもむろにそこから一冊手に取った。この世界がどう言う歴史を辿ってきたのか俺には興味があった。どういった渴望でこの世界が出来たのかも分からないが、この世界の歴史を見れば少しくらいはわかるだろうと思っていたからだ。・・・だが、

「俺がいた世界と同じ歴史を辿っているか・・・。」

本を読んで見たところ、ここは俺の世界と同じもしくは若干異なる歴史を辿ってきた世界だということが分かった。

（まさかとは思うが、永劫回帰じゃないだろうな）

俺は苦虫をかんだような顔をしてため息を吐き本を棚に直した。そんなことはありえないと分かっているが、あいつなら何か生きてそうだなと思う自分が嫌になった。そして用も済んだしここから離れようとして気づいた。少し離れたところに車椅子に乗った女の子が本棚から本を取ろうとして悪戦苦闘をしていることに。

俺は、その女の子に近づいていくと女の子が取ろうとした本を変わりに取りそれを手渡した。

「ほら、コレが取りたかったんだろ？」

「あつ、ありがとうございます。」

女の子はいきなり現れた俺に驚いていたが、すぐにお礼を言ってきた。

「お前、車椅子に乗っているのに無茶するんだな。」

「いやあ、このくらいの高さなら取れるかなって思ってたんですけど。」

アハハと笑う女の子にあきれつつも俺はそこから離れようとしたが。

「ちょっと待ってください!!」

すぐに女の子に呼び止められた。

「なんだ？」

「あの、もう3冊くらい取って貰いたんですけど・・・」

振り向くと女の子が気まずそうにお願いしてきた。

俺は一度ため息を吐くと女の子のところに戻って行った。

「ほんとにありがとうございました」

「きにするな、これからあんな危ないことをしなければ俺も気にしない。」

「うぐっ・・・」

自分が危険なことをしていたのに自覚があつたのだろう。女の子は胸を押さえた。

「お前も今度から本を取るときは近くの人に頼めよ」

「・・・」

「?・・・どうした。」

女の子がいきなり顔をムスツとしてこっちを見てきた。明らかに何かいいたげな顔だった。

「名前・・・」

「名前？」

「さっきからお兄さん私のことお前としか言っていないやん。私には八神はやてって言う立派な名前があるねん!!」

「・・・ああ、そういうことか」

そこでやつと気がついた。確かに俺はこの女の子に対して名前で呼んではいけない。なにか言うときはお前としか言っていなかったこと。だがそれは名前を聞いていなかったのだからしょうがないだろうという気持ちもあった。

「それで？」

「え？」

「え？やないよ。私の名前を教えたんやからお兄さんの名前も教えてもらわな。」

俺はその言葉に少し考え自分の名前を口にした。

「・・・蓮」

「蓮？」

「ああ。」

「俺の名前は藤井蓮って言うんだ。」

異世界転移（後書き）

今日のお話

1 異世界に行く

2 図書館に行く

3 幼女に出会う

の三本でした。

感想もしくはここはこうすればいいという所があればどしどし送ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9829y/>

刹那・神呪神威

2011年12月6日16時46分発行